

戯曲

『 胡蝶 』

( 一幕 )

人物

胡蝶 十八才 巳(蛇)さん占い。女占い師。

平太郎 七十五才 演歌師

作造 八十才 蝦蟇の油売り

男(声) 二十五才

女(声) 二十七才

1

舞台と客席を分離しない。客席も含めて、一つの世界であり、体験である。連続する空間と時間。現在と過去が交錯する。舞台装置は、老人二人が腰掛ける床几以外特にいらない。石切神社の場は、スライドを使っても、何もなくてもよい。上手半分の真つ暗な舞台(ここで演じられるのは、主に過去である)。闇は観客の想像の場になる。闇の中で何かが動く気配がする。数分前から(予定された開幕時刻から)、すでに芝居は始まっている。開幕ベルはない。猫のなきごえ。闇の中で、声と音だけの芝居が始まる。

胡蝶 来はった。

戸を開ける音。

男 逢いたかった。どない会いたかったか…

何処におっても、思うのはお前のことばかりや。なにしてんのや

ろ、なにを思ってたんねんやろ。一分でも一秒でもはよ顔が見た  
い。

胡蝶 うちも、うちもや。

抱き合つ男女の気配。

胡蝶 そんなせかんでも。

衣擦れの音

男 胡蝶、寒むないか？

胡蝶 寒いことなんかない。あんたの体が熱い。ほれ、あんたの  
体に汗が浮いてる。

男 なんの音や？

胡蝶 ほおずき。待つ時間が長すぎる。

男 がきみたいやなあ、ほんなら、わしは、胡蝶のほおずきなら  
したる。

胡蝶 あっ、

(間)

男 胡蝶、わしにほおずきくれへんか？

(間)

男 み、みいさんは？

胡蝶 あそこにいたはる。

男 何や、天井にいたはったかいな。

男女の絡み合つ音。

男 胡蝶、そんなことしたらあかん、出てしまふがな。あかんいう  
のに。

胡蝶 出したらええやないの。又、大きいし たげるよって。

バサツとものが落ちる音。

女のうめき声。

男 みいさんが来はった。みいさん、この子の首絞めたって、もっ  
と、もっと締めたって。

胡蝶 あっ、止めて、みいさん、うち、死んでしまっ。  
男 どうや、気持ちええか？  
胡蝶 あっ、あっ

男の息が乱れる。女の息が乱れる。抱き合う男女が一瞬見えて、闇に溶ける。後は、男と女の息づかいだけが小さく聞こえる。それは、やがて、川のせせらぎに変わる。  
下手にスポットがあたる。床几に平太郎。

平太郎 音川の流れる音は変らへんけど、昔は蛍が群れるほどおつた。まるで、霧が光ってるみたいやった。それに、玉虫もよう飛んできた。水を飲みに来る狸や狐もよう出おたなあ。ほんま、おらんようになった。それで、人間の数だけがやたら多なつてしまつた。

客席から作造が胡蝶蘭を片手に登場。

平太郎 作やん、今日も石切さん参ってきたんか。

作造 そうや、毎日の、たった一つの楽しみ やもん。下るんも一歩ずつ、上がるんも一歩ずつ、途中で死ぬかもしれへん。

平太郎 きれいなあ、その花こうてきたん？

作造 胡蝶蘭や。

平太郎 高いもんこうてきて、金持ちやなあ、作やん。

作造 すぐ枯らしてしまっんがせきの山やけど、何や、懐かしい気しつ。

平太郎 (蘭の鉢を手にとり) 紋白蝶がとんでるような花やなあ。

作造 もう三十年か。

平太郎 胡蝶はんのことか？

作造 うん。

平太郎 うちの光子がトランプ占いで、胡蝶はんがみいさん占い。

作造 どっちも、石切さんの美人占い師でえらい評判やった。

平太郎 うちのは、もう年増やったけど、胡蝶はんは十八、色がぬけるように白かった。

作造 みいさん参ります。あの澄んだ声が忘れられへん。

平太郎 その声に誘われるように、真っ白い蛇が手を合わせた胡蝶はんの二の腕をゆっくろと上がって行く、ほんま、肩のこりまで

鎌首あげよる。

作造 後は、神憑りになって、みいさんのお告げ。胡蝶はんは何も覚えてへん。

平太郎 みいさんは、寒いのに弱いよって、冬は抱いて寝る言つて

たなあ。

作造 (首をかしげる)

平太郎 どうしたん作やん?

作造 あんなもん、どないして抱くんやろ。

平太郎 さあ。

作造 それに寝てる内に……。あつたかいとこ、あつたかいとこ入っていきよる。ほんで最後は。

平太郎 なに考えてるんや、作やん。やらしいんやから。

作造 やらしいて、あんたも考えてたん。

平太郎 ……。うちとおんなじ長屋で壁一つ、よう猫が来とった。

作造 猫?

平太郎 うん、いつもうちのタマのあほが騙されて、表にすつ飛んで行きよった。

作造 (振り返る) あれ、後ろを誰かが走つたで。

平太郎 うわあ、包丁をくわえた女が、ものすごい顔して走って行きよる。

作造 鬼や、あれは、鬼やで。

作造、平太郎上手に近づき、暗闇の中を伺う。音と声だけの

芝居。

戸が、激しい音をたて、開けられる。

女 何や様子がおかしいと思てたら、やっぱりや。

男 ちやうねん、ちやうねん。

女 そんなかつこうしてて、なにが、なにがちやうねんよ。お前か、泥棒猫は。うちの人をたぶらかしよって、殺したる。ええ

い、殺したる。

男 止めて、止め言うのに、ひゃー、危ない がな、かんにんやさかい。

作造 刃物振り回すのだけは止め。

激しく争う音。

男 ひゃー。(男がひっくり返る音)

作造 どないしたんや、平さん。

平太郎 畳に出刃包丁が突き刺さってる。

平太郎、作造の横からのぞき込む。

平太郎 みいさんの頭を出刃包丁が突き刺しよった。

男 分かったで、わしはこの畜生にたぶらかされてたんや。なんや、目がさめた気する。

胡蝶 畜生違う、神さんや、あんたは、神さんを殺したんや。

女 なな、何を言うんや、なんやその目は、人の男とつといて、よ  
う、そんなことが言えるわ。

男 何を言うてんねん、わしがこんな小娘に本気で惚れると思う  
か？ちよと考えたら分かるがな。な、帰ろう。わしには、お前し  
かおらへんねんから。

作造 そんなに、薬屋の養子がいごちええんか。

平太郎 胡蝶はんに言うてたんはみんな嘘やったんか？。

男 うるさい、他人が何をこちゃこちゃぬかす。

女 この畜生、まだいごいてくさる。縦に裂いてやる。

男 止め、もうええやないか。

戸が荒々しく、閉まり、男と女が去って行く音。

胡蝶 みいさんかんにん。痛かったやろ、かんにんや。かんにん  
や。

胡蝶のすすり泣く声。やがて、それが狂ったような笑い声に  
変わっていく。平太郎、作造下手に

作造 あんな事があつたんか。

平太郎 えらい騒ぎやってんけど、あんたは、東北の方に行つて  
知らんだんやなあ。

作造 季節は何時やったんやろ？

平太郎 夏や、うちの前にようけほおずきがなつてて、

胡蝶（声） おじさん、一つもうてもええ？

平太郎 一つでも、二つでも持つて行き、又、ほおずき鳴らすん  
か。

胡蝶（声） うん。

平太郎 まだ、子供なんやなあ、胡蝶はんは。

胡蝶（声） しらん。

平太郎 そんな走つたら、こけるがな。背中に商売道具担いで、ほ  
おずきならしながら、坂道を降りていく後ろ姿。綺麗というより  
一途で可憐やった。

（間）

作造 蝦蟇の油売りで、日本中回つてたもんな。帰ってきた時は、

胡蝶はんは、毎晩石切さんに立ってた。

平太郎 昼間は誰も姿見たもんはおらへん。真夜中になると、真っ白な一重で、どこからかすーと現れる。それは、月明かりに浮かぶ真っ白なみいさんみたいやった。

作造 あそこへ行ったら、綺麗な女がいる。僅かな金で抱ける。悲しい話しやなあ。話しかけても、澄んだ目でじっと見るだけ。ときどき、鈴を振ったように笑う。

平太郎 胡蝶はんは、誰かを探してたんやないやろか？男に抱かれた後、いつも、気落としたような目をして、相手を見るといつ話しやった。

作造 猫のなき真似のあの男を探しとったやろか？あんなむごい仕打ちをした男を。恨むんちこて、気がふれても、まだ探してたんやろか？

平太郎 さあ、  
作造 探して、殺すつもりやったんやろか？  
平太郎 それとも、抱かれるつもりやったんやろか？

(間)

平太郎 わし、あん時の事今でも夢にみる事があるねん。

作造 あん時って？

平太郎 春とはいえまだ、寒かった。梅は清らかに咲いても、桜はまだやった。

作造 (歌う) 梅は咲いたか、桜はまだかいな。

平太郎 作やん、歌下手やなあ。

作造 蝦蟇の油売りは歌うたわへんもん。

平太郎 光子と、しょうもない事から、ものすごい夫婦喧嘩したんや。光子が、浮気する甲斐性もないくせに言いよった。何を言いやがる、わしも男や、浮気ぐらいしたるで言つて、千円持って、家飛び出した。

作造 千円やと、ちょっとたらん。

平太郎 うん？

上手の闇の中に、平太郎が飛び込む。同時に上手の闇が消える。

石切神社の社(スライドでも、何もなくても良い)が現れる。舞台全体は薄暗い。稲妻が光り、雷鳴。

平太郎 もう、お百度踏む人もいてへん。空は、真っ黒や。えらい天気になってきたなあ。

平太郎、あたりを見回す。

平太郎 胡蝶はん、胡蝶はん。たしか、こなへんやて聞いたんやけど。なな、何を震えてるんや。わいも男やないけ。浮気の一つや二つ。それに、胡蝶はんは、わいの憧れや。しょうもない奴に抱かれるんやったら、わしが抱いたる。あんな光子と別れて、胡蝶と一緒に住んでもええんや。

二三歩下手に歩く。再び、稲妻、雷鳴。平太郎、頬に手をやる。

平太郎 降ってきよった。

平太郎、社の軒下にかけて込む。雨の音。

平太郎 せやけど、このまま帰られへんし、どないしよ。それに、ちよつと、怖なってきた。猫の真似でもしたるかニヤ。いちびってる場合ちがう。何や、泣きとうなってきたなあ。

気を取り直したように、又、舞台中央に。

平太郎 胡蝶はん、胡蝶はん、おったら返事して。なんもせえへんから、出てきて、急に話しがしとうなつたや。みいさんは三輪のお山に帰らはったんや、いつまでも泣いてたらあかん。

平太郎、社の方を見る。

平太郎 胡蝶はん、胡蝶はん。

平太郎、社に近づき、空を見上げるが、ふと、気配を感じて、振り向く。

平太郎 なんや気配がする。どこやろ？

平太郎、社の床下を覗く。同時に稲妻。平太郎、うわーと叫び声を挙げて、後ろにひっくり返る。

作造

(舞台下手) 何や、どないしたんや平やん。

平太郎、床下を指さしたまま、立ち上がれない。  
作造、平太郎の横に駆け寄る。

作造 なんかいてるんか、平やん。

平太郎 みいさんや、みいさんが鎌首あげて、真っ赤な目をして、  
わしをじっと見てるんや。血の涙流してる。かんにんや、かんに  
んや。

## 暗転

2

床机に平太郎、作造下手から現れ、平太郎の横に腰かける。  
蝉の声。

平太郎 今日も石切さん行ってきたんか？

作造 鳩と遊んで、お百度踏む人見て、いつもおんなじような景色  
やけど、毎日が違う。一時でも同じものはないんやなあ。絶えず  
流れていく。

平太郎 そういうたら、長屋を潰すんやて。

作造 息子がビルにする言うてきかんのや。ごめんな平やん。

平太郎 しゃない、時代やさかい。

平太郎 大道芸人ばかりが住んどった長屋。地の人は、五目長屋  
言つた。色とりどりいろんな芸人がおつたさかい。

作造 正月に、似顔絵かいて、いっこも似てへんやないか言つて、  
客に下駄で殴られた奴おつたなあ。

平太郎 おつた、おつた。頭から血い出して、それでも、へらへら  
わるとつた。

作造 えらかったなあ、あいつ。

平太郎 それに、紙芝居の谷やん。

作造 あんた、ええ年して、子供に混じつてよう見とつたなあ。

平太郎 谷やんが紙芝居しながら売とつた又キ覚えてるか、作や  
ん。

作造 平べったい飴で、瓢箪の形が描いてある。それを嘗めて瓢箪  
を抜く。一番難しいのは瓢箪のくびれ、それに外側も割ったらあ  
かん。上手いこと抜けたら、もう一枚。べとべとの飴、掌にのせ  
て、おっちゃん抜けたでえ。

平太郎 又キを嘗めながら、紙芝居見とつたら、谷やんが突然、わ  
あつと大声あげる。あつちや、こつちやで、びっくりして飴かむ  
音が、バリバリ…、バリバリ…。

作造 こつちも、生活かかっているもんなあ。紙芝居がおもろないほ  
ど、瓢箪はようけ抜かれる言つとつた。

平太郎 いろんな奴おつたなあ。

作造 うん、いろんな奴おつた。あいつらどうしてるんやろ。生きとるんやるか。

平太郎 猿回しのあいつは、猿が死んだ次の朝、生駒山に代わりを探しにいく言うて出たまま、帰ってこえへんし……。

作造 そういつたら、猿が死んだとき、自分の首に輪っか作って、作やん、この紐持って、わし回して、あいつの気持ちを知りたいんや言うて、子供みたいに、わあわあ泣きよった。

(間)

平太郎 一人消え、二人消え、

作造 いつの間にか、わしらだけになってしまった。

川の音。

作造 音川の音も、年々、小さく聞こえる。ほんで、そのうち聞こえんようなるんやろなあ。

平太郎 そうや、誰の一生も、一時(いつとき)の川の流れや。

作造 やがて、何も無い海に出る。

平太郎 一回生まれたら、天子さんでもわしらでも、一回死ぬ。

作造 ほんま、神さんえこひきないなあ。

(間)

作造 平やん、胡蝶はんてほんまにいたんやるか

平太郎 え、どうしたんや急に。

作造 幻やつたん違うやるか？

平太郎 そんな事言うたら、みんな幻や。

作造 川を見とうなつた。一緒にいこか。

作造、平太郎、舞台から、観客席に降りる。作造、足を止める。

平太郎 どないしたん作やん。

作造 わしも、胡蝶はんを金で抱いた男の一人や。

平太郎 急に何を言うねん。

作造 あんたと、胡蝶はんの話してから、なんべんもそう思うんや。

平太郎 誰も、そんな綺麗な人間はいてへん。わしもあの夜、胡蝶はんを抱いたんと一緒や。もう、自分をせめんと忘れ、みんな、昔の事や。

作造 いいや違う、反対なんや。忘れとくないんや。金出して、抱いても、猫真似の男に間違えられてても、それはそれでええ。わしは、胡蝶が好きやった。あれは、夢のような一時やった。胡蝶は、わしの腕の中で、何回も、声をあげてくれはった。

平太郎 そうか、そやったんか。せやけど悲しい恋やなあ。

作造 影法師みたいな恋や。せやけど一番辛かったは、みんながおさい銭言つてたように、胡蝶はんの後ろ帯に金挟んだときや。

客席中央で、二人並んで、舞台を見上げる。

平太郎 ころやって、音川を見ると、あの夜を思い出すなあ。音

川はあの日も、今も、きれいな音たてて、流れて行く。

作造 あの日、二人で幻を見たんやるか？

平太郎 せやけど、美しい幻やったなあ。

作造 あんたが桜井で、わしが大阪からの帰り、近鉄の踏切でばったりおおたんやったなあ。

ライトで舞台に川の流れ。客席の二人のスポットは消える。  
又、観客席に二人が現れる。

平太郎 蒸し暑いなあ、作やん。大阪はどう やった？

作造 あかん、あかん、途中で雨にまで降られてわやや。蝦蟇の油より、オロナインの方がよう効くでえてやじられて、

平太郎 演歌師もあかん。高校三年生ひいて言われても、わし、しらんがな。バイオリンの弦で、又、顔ひいてしもた。

作造 わしらの商売も先長ないなあ。

平太郎 なんやしらんテンポがあわんようになってきたなあ。

作造 ほな一緒にいいのか。

舞台に向かって歩き出す。そして、作造立ち止まる。

平太郎 どないしたん、作やん。

作造 川ん中に誰か居る。

平太郎 何処や。

作造 ほら、あそこや、ほんやりと光ってる やろ。

平太郎 なんや、蛍やないか、それもようけ 群れてる。

作造 蛍か…。

胡蝶（声） ほ、ほ、ほたるこい、  
平太郎 いや、胡蝶はんや、すっぱだかで水を浴びてる。

胡蝶（声） あっちのみずはにがいぞ。

作造 見たらあかん、

胡蝶（声） ほ、ほ、ほたるこい。こっちのみずはあまいぞ。

平太郎 胡蝶はんの体を包むように蛍が…。

作造 きれいなあ、（平太郎の前に立つ）せやけど見たらあかん。

平太郎 （指をさす）蛍が、胡蝶はんが…。

作造振り返る。

舞台上、小さな光の点が乱舞し、その中に胡蝶の裸身が浮かび上がる。やがてそれは、光の白い帯になり、川を遡る。

作造 胡蝶はんが、みいさんになった。

平太郎 真っ白い蛇になって、音川を上がって行く。

作造 行ったらあかん、胡蝶はん、行ったらあかん。

駆け出そうとする作造、袖をひく平太郎。

平太郎 行かしたり作やん、ここにおっても、しゃないやないか、  
作やん。

作造 いやや、行ったらあかん。わしのため にだけでも、おつて。

平太郎を振り払って、作造舞台上に駆け上がる。平太郎、後に続く。暗転。

（間）

闇の中で、胡蝶の声、一番最初の科白と全く同じ。

胡蝶のときめいた声。

胡蝶 来はった。

—幕—